

○道明美保子*、木村光雄** (*滋賀県立大、**神戸女大・院)

目的 先にアッタル古墳出土染織布の中に藍染めとケルメス染めの糸を巧みに混紡することによって貝紫染めに見せたものがあることを見出だして報告したが、今回は主として黄色及び緑色染めに使用された染料の鑑別を目的として、(a)7～8世紀のシルクロード遺跡からの出土染織布7点及び(b)室町時代の前期辻が花染めの絹布1枚について、それらの染料の鑑別を試みた結果を報告する。

方法 (a)の試料はいずれも1cm²程度の残欠であって黄色～青色の色調を有しており、(b)は淡いベージュ色の地に赤橙色と黒色の染め分け模様と緑色他の小さな刺繍部分を含んでいる。一般的に黄色染めに使用される天然染料は種類が多い為、それらのいずれであるかを特定するのが難しいのであるが、今回は試料の製作された地域と時代を勘案して、梔子、荊安、黄蓮及び楊梅を選んで、これらの染色布との対照によって鑑別を行なった。すなわち、各試料からDMSOまたはDMF+NaOH水溶液によって色素を抽出し、それらの吸収スペクトルを測定して対照試料と比較した。

結果 (a)の試料の場合、黄色部分は黄蓮(または黄蘗)染めをしたものまたは梔子染めをしたものと推定される試料が多く、緑色部分は藍染めをした上に梔子染めをしたものと推定された。次に、(b)の試料の場合、緑色の刺繍部分は藍染めをした上に黄蓮(または黄蘗)染めをしたものと推定され、また、淡いベージュ色の地は紫外線照射後の対照染色布の色調との比較及び吸収スペクトル測定結果から楊梅染めによるものであろうと推定することが出来た。